

Title	北畠親房(中村直勝著, 星野書店發行)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.174(502)- 175(503)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

六(之も同じく抜刷に付、圖版番號は第十七——第廿二となつてゐる)。(森貞成)

北 畠 親 房

(中村直勝著
星野書店發行)

本書は、わが南北朝時代史の權威中村直勝氏が、北畠親房顯家兩卿を祭神とする別格官幣社、阿部野神社の創立五十年祭に際して、祭神御傳記として編纂せられたものである。

著者は、兩卿の事蹟は、兩卿が後醍醐天皇の忠臣であり、近侍であり、その恩寵に感激した父子であつたが故に、すべて後醍醐天皇を中心としたものでなければならぬといふ見地から、本書に寄するに「後醍醐天皇」を以てしておられる。——第一章「踐祚まで」から第六章「月に叢雲」まで、正應元年十一月二日の御降誕から延元四年八月十六日の御晏駕まで、——

第一章「後の三房」から第七章「神道觀」までを含む本編「北畠親房」に於ては、正しい材料、冷靜な態度を以て、わが北畠准后の國史上の地位と役割とを嚴正に檢劄考究しておられる。

著者は卿の國史上の地位と役割とを、單に南朝の忠臣であつたから、その著神皇正統記が南朝の正統なる所以を堂々と宣言したから、正統記の中に含まれてゐる史觀が斷然光輝を放つてゐるから等々ばかりではなく、卿の時代が國史三千歳の中に於て最も重要な時代——中世的な宗教への妄信時代はまさに去つて、理性の批判に訴へ、純理的な立場で事物を觀ようとし初めた時代——であり、斯る非常時に際し複雑極る時期に際し、よく一世を率ゐて

誤りなからしめ、その理想の實現を信じてそれに努力した人であるといふことにそれを求めようとしておられる。著者に依れば、神皇正統記の眞の意義と價值もこの方面からよりよく了解せられるのであるかも知れない。

最後に、附編として「鎮守府將軍」、「阿倍野の露」の二章より成る北畠顯家がある。

本書は「著者の言」に依れば専門學者への提示ではなく出来るだけ平易に説くことを、出来るだけ興味を以て讀まれることを必要條件として書かれたものである。然し乍ら、本書の含む内容は、決して「通俗」的なものではない。行文平易、津々として盡きざる興味を覚えしめ、その間自ら卿の思想と學識とを腦裏に印刻せしめ、合せて宋學に於ける獨清軒玄惠、北畠准后親房に依つて大覺寺統の思想界に於ける地位を決定せられんとし、孟子の如き所謂革命の書が、公然と朝廷に行はれてゐることは、建武中興の如き大事業が遂行せられたといふことの背景として記憶せらるべきことであらうとせられて時代を動かす力としての思想に思ひを潛めておられる。

氏の抽象の力は強く(私の今の考を素直に申すならば、恐らく此一巻(神皇正統記)の著述を試んとする動機は嘗て親王が世良親王の夭折に遭うて憂き思を悲しんで居つた時に萌したものでないかと思ひ、次で東國に御同道申上げた義良親王が神風によつて伊勢に吹き戻され給うたのみか、間もなく天位に即き給うに至つた事の不思議さを彼が其の當時に深く研究した伊勢神道の含む哲理等から靜觀して割り出した一つの哲學——開闢以來の歴史に

於て常に其の歴史事象の根幹に横はり歴史發展の大動力とも見得る古今を貫く原則を發見し、それを正理とか神道とかいふ文字で現はしそれを説いたものが本書ではないかと思ふのである。(二九八頁)

親房はそれをよく知つて居たらう。けれども巧に體をかはして「官途事元弘一統、公家政道、爲被復舊規也、坂東人々出身昇進、以後可被追治承以來代々風儀事歟」と言ひ、坂東出身者の推舉は頼朝の先例に學びすべて將軍の推薦による外に方法なき事を申遣はすのであるけれども、親房は是が非でも官途の昇進を求め、それを親房が阻止して居るかに解し、——或は解した様に見せかけて、親房を苦しめたものであつた。親房としても全く苦しい立場に置かれた。それがために種々の先例舊規の調査研究が必要であつたらう、『職原抄』の編述がこの必要からだとは言ひはしないが、何等の因縁なしとも思はれない(二三七頁)しかも研究的良心は飽く迄強く、現實に遠ざかることなく、加ふるに學問的情熱は熾烈にして遺憾なく行間に溢れ、犇犇と胸に迫るものがある。

新史料に依る新解釋も隨所に見られ、例へば、横橋家雜掌の晏案に依るその如きはその一例である。即ち卿が興國四年十一月十一日、關大寶兩城の陥るまで常陸に在つたこと、又興國七年十一月十三日には、日本書紀をその子春日侍從顯能に授けており、正平三年には大和におつたことは明かであるが、如何にして、何年に常陸を去つて近畿に還つたかを明かにすることは從來出来なかつたが、氏は本書に依つて卿は常陸から海路尾張の宮崎に到着したのであるとせられてゐる。本書の最初の目的は十分達せら

れ、更に専門學者への提示も見事になされてゐる。さきの「著者の言」は著者の謙讓の致すところであり、偶偶著者の學者としての偉大さを實證するの結果となつたのである。是非一讀をお薦めする。

(菊判本文四二二頁、定價金參圓)(淺子勝二郎)

歐人の支那研究

(石田幹之助著)
共立社發行

極東に關する西人の研究は、極めて歴史古く、部門多岐に互り、かつ、あらゆる國語に編述され、これに一通り通曉することは、尋常人のよくする所ではない。我石田幹之助氏は、一方東洋文庫主任として繁務に携る傍、此方面の書誌學に研鑽深く、其學識は、内外の學者に認められてをる。支那學者マスベロ氏の如き先年日本來朝の際上京直ちに東洋文庫を問ひ、其蒐藏を綿密に閲した程の研究欲旺盛の人であるが石田氏の學識を稱贊し、在留各國學者間にも極めて敬重せられてをる旨を予に語られた事を記憶する。「現代史學大系」の企てが發表せられるや、同氏の「歐米人の支那及び日本研究」は、最も矚目せられたる篇の一つであつた。然しながら實際の所多忙寸暇なき氏が果して此大事業に身をもつて當られ得るや、世間は書肆の發表の眞偽を疑つた程である。然るに學に篤き同氏は、周到なる注意、綿密なる考證を重ね、一つの書名、一つの發行年月日すらいやしくする所なく、此處に萬人の待望した「歐人の支那研究」なる快著を學界に提供せられた。氏の絶大なる學的貢獻に對し、吾人は衷心より感謝に堪えぬ者である。